



Title	『古今通』の刪補について
Author(s)	多治比, 郁夫
Citation	懷徳. 1984, 53, p. 16-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90625
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『古今通』の刪補について

多治比 郁 夫

(一)

五井蘭洲著『古今通』は、古今和歌集の全卷（真名序を除く）を註釈したもので、宝暦初年の著作である。ところで、懷徳堂文庫所蔵の『古今通』には加藤景範の付言が添い、『古今通』は五井蘭洲先生の著作するところであるが、「ひとつ子のむすめ」に読ますためのすざびであつて、万全を期したものでない、それでも伝え聞いてこの著作を見る人もあろうから、削るべきは刪り、補うべきは補い正してくれとの遺託を受けていた、昨冬から「先生したへる人ども」の協力を得て刪補にとりかかり、今ようやく遺託を果したものである。付言の年紀は天明五年季冬であり、蘭洲が『古今通』を執筆してから三十余年後である。

かつて、加藤景範に関する資料を求めて各地の図書館・文庫を訪れたさい、『古今通』についても数本の写本を閲覧し、刪補本は蘭洲原文に比べ別本といえるほど趣を変えていることに気付いた。当時の所見本は、その後にもとめた「加藤景範年譜」（『大阪府立図書館紀要』第八号（昭和四七年三月刊）に簡単な解説を施して入れたが、蘭洲の原文と刪補本との関係については、別稿に記すこととして詳細を記していない。その後私の関心を去って別稿は果さないままに終ったが、右の問題についてその後特に論じられたものもないようなので、このたび『懷徳』誌に寄稿を求められたのを機に、旧時のノートをたどりながら、『古今通』の原文と刪補本との関係を報告してみることとする。なお、宇佐美喜三八氏「古今通について」（『語文』第一〇号（昭和一九年一月刊）は、

懷徳堂本（刪補本）によつて論じられたものであるが、古今和歌集の註釈史、特に五井蘭洲と同時代の漢学者の「古今集」観についても詳細に記されるので、本稿ではそれらについて一切省略した。

(二)

『古今通』の所見本は次の七種である。

①宝暦四年初夏、加藤景範筆写本。八冊。大東急記念文庫蔵（弥富破摩雄氏旧蔵）。

②宝暦六年春、吉田盈枝筆写本。五冊。『懷徳堂考』によれば平瀬家旧蔵。朝日新聞社を経て、大阪府立中之島図書館蔵。

③明和九年春、加藤景範奥書本。八冊。中之島図書館蔵。

④寛政十一年、小林歌城手校本。三冊（第一冊欠）。無窮会図書館蔵。

⑤筆写者（年）不明。六冊。国立国会図書館蔵。

⑥享和元年、加藤敦善（景範養子）筆写本。四冊。静嘉堂文庫蔵。

⑦筆写者（年）不明。七冊。懷徳堂文庫蔵。
所見本の冊数はまちまちであるが、すべて八巻である。

各巻内容は、巻一に仮名序を、巻二以下に、古今和歌集の巻一―三（春上下・夏）、巻四―六（秋上下・冬）、巻七―十（賀・離別・羈旅・物名）、巻十一―十三（恋一―三）、巻十四・十五（恋四・五）、巻十六―十八（哀傷・雑上下）、巻十九・二十（雑体・大歌所御歌ほか）を収める。

ところで、右七本のうち、①―③は蘭洲の原文を筆写したもの、④―⑦は天明五年の景範付言をもつ刪補本である。蘭洲の原文を写した三本のうち、②は懷徳堂五同志の一人吉田盈枝（備前屋吉兵衛）の筆写本で、上欄には盈枝の筆になる付箋がおびただしく、下欄にも筆者不明の付箋数葉があつて、それぞれ『古今通』に対する意見がうかがえるのであるが、景範の刪補本成立と直接関係がないので、本稿では特にとりあげない。③は、奥書に「此編や、蘭洲先生、ひとつ子のむすめのためにあらはし、しめされたる也、なべての世にひろめむと、としをかさねてなせるにあらねば、あやまることなくしもあらじ、みんなさるこゝろせよ、明和壬辰の春、加藤景範しるす」とある。蘭洲の原文を写すほか、古今集二〇巻の各巻平均十首あまりに景範が按文を書き加え、また極く稀に三宅春楼説が記される。これらは①にも記載があ

ることから、③の景範與書本は明和九年春に①を転写したものと考えられる。従つて、明和九年までの、景範や春楼の『古今通』に対する見解を知る上で役立ちそうである。さて、①の宝暦四年景範筆写本は、蘭洲の原文のほか、上欄空白に、③に記録される景範・春楼説が記され、その数は③よりはるかに多い。③が転写された明和九年以後も、『古今通』に関する意見を景範は書き続けていたのである。そして、もっと特徴的なことは、一首の註釈ごとに一枚から三枚におよぶ付箋を、上欄や下欄（「下方につけたる紙再校也」とある）に貼りつける。この付箋は蘭洲の註釈を吟味したもので、「こゝハいかに改むべきや」とか「よきほどに節略し玉はんや」とかい、「然り」「貴駁のごとし」などある処から、複數で吟味を行ったことが確認できる。しかも第一冊の前半までは、削るべきところが括弧で囲まれ、詞も補われる。おびただしい付箋や括弧や本文中の書入こそ、刪補本付言にいうところの、先生を慕う人々の協力を得て行った、刪補の作業の痕跡であると考えられる。旧蔵者の弥富破摩雄氏は、図書館本（所見本⑤）と対比した上で、「予蔵本ハ、モト蘭洲ノ原書ヲ景範筆写シ、其レヲ所謂『先生慕ヘル人』ト共ニ意見ノ交換シテ刪補セル

稿本也、コレヲ清書セシモノガ図書館本ナリ、サレバ予加蔵本ノ珍本ナル事ヲ自ラ知ラルベシ（明治四十年十二月）」と書いた紙片を貼り込んでいるが、まさにその通りなのである。以上のくだくだしい説明を要約すれば、蘭洲の原文は①②③いずれによつても知ることが出来るが、③によつて明和九年までの加藤景範らの見解が知られ、①によつて刪補の具体的な作業を知ることが出来るのである。

④⑦の刪補本では、⑤国立国会図書館本と⑦懷徳堂本の間に多少の差異がある。このことは前掲の宇佐美氏論文がすでに指摘されるところで、⑤は⑦より先行するものと考えられる。詳細な照合を行っていないが、刪補本に④⑤、⑥⑦の二系統があるようである。ただし、その差異はあまり大きなものでないから、本稿では刪補本として⑦懷徳堂本を使用することとした。

(二)

五井蘭洲の原文が削られ補われるのは次のようである。

まず、巻頭の序文について。①大東急文庫本には第一冊の見返に「改作」の序文が貼り込まれており、その末

尾に「カヤウの趣ニ改テハイカン」とある。景範が改作して誰かに示し、是非を問うたのである。蘭洲の原文と対比するに、原文の前半（ほぼ一丁分）を数行に圧縮するが、原文の趣旨は生かされている。後半はほとんど改訂がない。そして、この貼紙に記されたとおりの序文が、刪補本『古今通』の巻頭に据っている。

歌の註釈の刪補は、卷一（春上）から若干の例を掲げて示すこととしよう。

3 春霞たてるやいづこ見芳野のよしいづこにかすみはたてるぞ見よとかけたりのよしいづこにかすみはたてるぞ見よとかけたりの山に雪はふりついづこのよしのの山はたゞ重ねことばなり

契註、常に春かすみといふハ、たゞ霞をいひて春には用なきを、これハ初春の歌なれば、春は主にて霞は伴なり。愚案、ふりつゝのつゝは、雪はふりつゝといへるをかさねたつまでにて深意はなし。雪のふるに霞のたつべきやまもなければ、これはいまだ霞のたゞぬをよめる歌なり。へつゝをながらの義とするハ又別なり

上欄に付箋があり、「山には雪ふりながら、いづかたぞ霞たてる処ありや、既に春たちたれば、霞のなきこととはあるまじ、ケ様にも聞ゆるか、是非いかゞあるべき。然らばつゝの語常の通也。雪の中に霞たゞぬとて、歌によま

れぬやうはあるまじ。精当」とある。刪補者は「つゝ」の解釈に迷ったようであるが、結局は蘭洲の原文に従った。刪補本は次のようである。

みよしのゝよしのゝ山は重ね詞也。いづこに霞はたてるぞ、みよとかけたる也。降つゝハふりつゝと重ねたる也。深山の春の色のをそきさまをいへる也。雪のミふりていまだかすみのたゞぬ也。

6 春たてば花とや見らむ白雪のかゝれる枝にうぐひすの鳴かくの如くつもる枝といふ心にいへり

契註、此歌菅家万葉に載させ給へり。見らんは見濫とかゝせ給へり。見るらん（朱筆）の古語也。愚案、凡此集に花といふハ一種にかぎらねど、こゝは上の梅といふにつきたれば梅をいふならん。へされど梅をかりて雪をよむ。下の歌同じ。実の梅はおくに出づ。

上欄の付箋に、「されど梅をかりて以下ハ、あまりしれたることなり。是等は削て可ならん。然」（朱筆）、下欄の付箋に、「旁註、かく花のごとく枝といふべきや。契註、見えんとかける本を排して、菅万の見濫を証に引たる也。さなければ無用也」。これをうけて刪補本は次の通り。

第二句、花とやみえんと書たる本有。非也。契註、此歌菅家万葉に載給へり。見らんと見濫と書せ給へ

り。愚案に、見らんハミるらんの省語也。此集に花といふハ一種に限らねど、こゝハ上の梅といふにつきたれば梅をいふならん。

(補)冬、雪のふりしには鶯はなかぎりしに、春立ハ華と見てや鳴と也。かゝれるハ雪のわづかなるをいふ。点々花に似たる也。

刪補本の凡例に、「後によき解を得たるは」補註として示すとある。つまり(補)は加藤景範の註釈で、この(補)の趣旨は、すでに明和九年奥書本に「景範按」として記される。

11 春きぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりハあらじとぞおもふ

へ契註、公任卿和歌の品の中に、この忠岑の歌を出して、すぐれたるところもなく、わろき所もなく、あるべきさまをしれるなりといへり。鶯のなかぬほどは、さはあらじとおもふと也。愚案、このあらじは、上の春きぬといふをふく^{うけて}ミたるなり。鳴ぬかぎりハ、春の来りたるにてはあらじといへるなり。

下欄の付箋に「かくいはけなき詞をのべて、まことハ鶯を賞玩して、待意のふかきを詞にあらハさでミする也。

是ハ至てよき歌と褒すべし。公任卿いかゞ心得たまへるや。あるべきさまとのみ評せるハ覺束なし。忠岑の心をしらぬとミゆ。この契註ハ削るべしや」とある。刪補本はその意をうけ、また詞を足して、次のようである。

あらじハ、上の春来ぬといふを受けて、鳴ぬ限りは春の来りたるにハあらじと思ふ也。鶯の声をきかぬ間は、春を春とも得思ハぬ也。鶯を待心のいとふかき也。

14 鶯の谷より出る声なくハ春くることをたれかしらまし
暦はいづくにもありて、立春はしるべけれど、かくよむハ詩歌のならひなるべし。

上欄の付箋に「鶯声の春めくを賞玩して、春をしるとよミたり。もし暦にてもしるゝといはゞ、此春めくの主意ハたゞず。ひとりならひのミにもあらず。此註ハ削るべし。然り」とあり、刪補本では原文にない次の註釈が載せられた。しかし、(補)は付されていない。

鶯の春めく声なくハ、春をも春と思はじとの心也。
28 もゝちどりさえづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく

この歌、元来恋歌なるべし。ふりゆくハ人にふるさるるなり。世上春とて人もおもあらたまるに、たゞ

われひとりふるさるとなり。こゝに入れば、わが年の一年くはよりてふりゆくにとりなしたり。

年のふり行はわれのミにかぎらねば、そのせんなし。ゆへに元来恋歌ならんかとおもはる。又ハ恋歌に託して我身の世に不遇なるをいへるか。もゝちどりは伝あるよしなり。しかるに、定家卿もさだめの給はざればおぼつかなし。文字につきていはゞ百鳥なり。鳥をもて春に啼なれば、春に至りて諸鳥のおほく音をいだすなり。ちはやすめ字なり。つといふと同じ。箇の字なり。ちといふもつといふも、数をかぞふる詞なり。堀河百首に三百をミつもゝちといへり。こゝも百千鳥にはあらで、百箇鳥なるべきか。ちどに物おもふなどいへるも、千千にはあらで千箇なるべし。

景範は、明和九年奥書本に「範云、恋の歌か不遇かとの説、恐くハ鑿せり。たゞ老をなげくとミてよし」と記す。刪補本では「もゝちどり」の説明も別の視点から行っている。

栄註、万葉に、わが宿の榎の実むれはむもゝち鳥千鳥ハくれど君はきまさず。鶯といふ説あれど、鶯は榎の実はむれはむまじければ、多くの鳥と聞ゆ。し

かれは百千の鳥也。春は物ごとに改まりて新たなれど、我身ハ春をへてふり行と、老をなげく也。

53よの中に絶て桜のなかりせば春のこゝろハのどけからまし

土佐日記には、さかざらばとあり。この歌伊せものがたりにあるときの心とはかはりあるべし。これ撰者の、章をたち義をとるこゝろなるべし。上の歌にならべて見るに、忠仁公の歌（年ふればよはひは老ぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし）は富貴の人の桜をめでたるなり。この歌ハわび人の歌なり。世は春に桜の咲たれば、人々心もそらにたのしみのゝしるおりなれど、たのしめるおもひもなければ、桜のなき春こそ我はのどけからまし、といへるこゝろなるべし。

刪補本では、（補）と記すことなく註釈を次の如く改めた。契註、咲を待、散を惜ミ、盛なる程も雨をいとひ、風をおそれなど、愛するあまりに心のいとまなきより、なべての世に桜といふ物の類絶てなくバ、春の心は中々のどけからましと也。桜をいとふにハあらす。

以上六首について、蘭洲の原文と景範の刪補文を対照

させた。前半の三首は原文を節略しながら若干のことはを補つて、蘭洲の註釈の主旨をかなり忠実に伝えているが、後半の三首は蘭洲の註釈を否定して削り去り、新しい註釈に代えた。しかも補註を示す筈の(補)も付していない。『古今通』全般についてみると、割合としては前半の形をとるものが多いが、それでもすべてに手が加わっている。冗長なことは、理屈っぽい語釈を削って整理する。そしてまた、蘭洲の原文をもっとも特徴づけている仮託とか教誡とか勸善懲惡とかの解釈を、ことごとく削って改めるのである。次に、刪補本で姿を消した仮託や教誡とした註釈若干を示しておく。

37よそにのミあはれとぞ見し梅花あかぬ色香は折りて成けり

……これより下、梅の歌五首、梅を詠じて教誡の心をよせてならべたり。

41春の夜の闇はあやなし梅花色こそ見へね香やはかくる

……おほよそ世のねぢけ人の、かしこき人をそねみて、さかしらなどしておほひかくさんとすれど、益なくて、よき人のよきはあらはるゝとなり。

69春霞たなびく山の桜ばなうつろはんとや色かはりゆく

……この歌、盛衰のことはりを桜によせていへり。盛者のおとろふるも急にはなくて、漸におとろへゆくなり。かしこき人へ、その時に心を用ひてこれをふせぐ。おろかなるものは、おとろへのかぎりになりて始めておどろくなり。

238花にあかでなにかへるらんをミなへしおほかるのべに
ねなましものを

……勸善懲惡の心明らかなるべし。

271うへしとき花待どほにありし菊うつろふ秋にあはむと
やミし

……およそ世の人、君の寵愛を得てへ、その勢に乗じ世をもはぐからず、いつ迄もかくあるべきと思ひ、人もおろかなるハさおもひて、かつて寵のおとろへて、身のわびしくならん事をおもはず。(大江)千里の、これをおもひて世人のいましめとせんとして、菊に託してよまれける也。

(四)

歌を仮託や教誡として解釈する傾向は、恋の歌においてもっとも顯著である。卷十一(恋一)の初めに、蘭洲は長文の解説を付して次のようにいう。仮名序に「今の世

の中色につき、人の心花になりけるより、あだなる歌、はかなき言のみ出でくれば、色好みの家に、うもれ木の人知れぬ事となりて」とあるところから、「あだなる歌、はかなきこと」は恋の歌であり、これは和歌の本意でない。ではなぜ古今集一千百首の中に、五卷三百六十首もの恋の歌を取めたのか。詩経に淫奔の詩が多いのに倣って、世を誡め人の教としたかとも考えられるが、淫者自らの淫詩が教となるとは思えない。人の色を好むは誠なりとの説もあるが、恋は目に使われて出る誠で、本心の誠とは云い難い。契沖が「恋を先とする心也」というのは、出家としてあるまじき識見のなさである。夫婦和合の徳が天下に及ぶとして、詩経関雎に擬するものも正しくない。不義非礼にあつてさまぐの悲喜怨悔の情景を詠むところに恋歌の本質があり、夫婦和合すれば恋の歌など詠まないであろう。そこで蘭洲は、恋の歌は男女の間に限るものでなく、すべて人を恋うものであり、また恋に託して己が志を述べ、世を誡め、また恋そのものを誡めるものである、恋の部の「題しらず」は実事であるとして作りごとである、とするのである。

これに対して①大東急文庫本の上欄の付箋には

其歌の多きわけハ、序にいへるごとく、人の心花に

なり、あだなるはかなきことの出来れば、世上の歌十に七八は恋の歌なり、実事によめるも題にてよめるも、およそ八世のはやりごととなれり。すべての歌数多き故、よき歌も外の部よりハ多き筈也。しかのミならず、此部にハとりわきおもしろき歌多かるべし

と記し、「褒貶勸懲などの意ハすこしもなき也」という。刪補本の恋部解説は、蘭洲原文の前半二丁分を削つて、付箋の趣旨に添つた数行の文章に替え、後半のみをこれまた縮めて生かした。次に蘭洲原文の恋歌の註釈若干を示しておこう。

469 ほととぎす鳴やさ月のあやめ草あやめもしらぬ恋もする哉

初の一念のまよひより、かく是非をわかたぬやうになり行ものといましめたり。

475 世中はかくこそ有けれ吹風のめに見ぬ人も恋しかりけり

此歌ハ、恋によせていにしへをしたふ心をよめり。

510 伊勢の海にあまの釣なは打はへてくるしとのミやおもひわたらん

およそ世の人、こゝろのとりおさむやうにて、われ

相応の樂ミのあるに、それをしらで、たゞくるし
くとのミ、おもひわたるべきにあらずとよめり。

512 たねしあれば岩にも松はおひにけり恋をしこひばあ
ざらめやハ

恋に託して、をのが志をのべたる歌也。しかるにた
ゞ恋の心へのミときてすまし置て、古今集を伝授せ
りといふは、いかなる心ゆへといふをしらず。

515 から衣日もゆふ暮になる時はかへすくぞ人はこひし
き

此歌、上の歌ともに、人の子のよめれば親をおもふ
也、臣のよめれば君をおもふ歌なり。契沖が、此集
の恋歌はミな男女の恋歌なりといへるは信じがた
し。

523 人をおもふ心はわれにあらねばや身のまどふだにし
らざるらむ

是は色を戒たる歌也。

以上は、卷十一（恋一）から氣儘に拾つたものである
が、蘭洲の註釈のほとんどは右の調子である。そして刪
補本ではこうした註釈をすべて刪つてゐる。

(四)

刪補本の景範付言中に、『古今通』を著作した動機と
して、蘭洲の次の言葉を伝える。

古の歌には古の事をしらるゝを、後の世の歌を見て
は其世をしるべくもあらず。さるは題詠をむねと
し、制禁のしげくなりきけるゆへなめり。されば何
の事にまれ、昔有し事の今なきを猶有とし、いまあ
れどなかりし昔のあとをかたくまもるめれば、いか
で其世のさまのしられむ。しか事のじちをうしなへ
るに、代々の名匠の、かくなりきけるあとをのみみ
まもり、ふるきにかへすをしへのなきは、うらみな
らずや。

蘭洲は、歌は実を伝えるべきもので、いにしへの歌には
実があつたと考える。しかるに後の世の歌をみると、題
詠や制禁によつて実がうかがえないものとなつてゐる。
しかも「ふるきにかへすをしへ」さえもない。蘭洲はこ
れを歎き、その一助とするために『古今通』の執筆をは
じめたのである。その執筆にあたっては、先人の説を参
考にするが、ある場合には先人の説を捨てて独自の説を
述べる。歌には詠者の真情がこめられてゐるものとして

真情を探るが、その過程において、朱子学者としての思想が濃厚に出ている。作者の真情として記すものが、志の表白であったり、またしばしば教誡、勸懲であったりする。蘭洲が日本の古典をあつかった著作は、『古今通』

以外に『勢語通』『源語提要』『万葉集詠』があり、それらにあらわれる文芸観が『古今通』にも濃厚に流れているのである。詳しくは、八木毅氏「勢語通について」、田中裕氏「源語提要・源語詠について」（ともに『語文』第一〇号所載）、また中村幸彦氏「五井蘭洲の文芸観」（『中村幸彦著述集』第一巻所収）を参照されたい。

さて、加藤景範は好きな父の薫陶を受け、はやくより和歌を学び、また自然と懷徳堂に学んだ。延享五年廿九歳の時、父が歌集を自撰して渡会文庫に納めたさい、五井蘭洲が序文を、景範が跋文を執筆した。すでに景範父子と蘭洲は、親しい間柄にあったのである。景範は、宝暦二年に『勢語通』『万葉集詠』を、宝暦四年に『古今通』を筆写する。この頃、蘭洲の「新題和歌百首」に和して、景範は中井鶯庵・川井桂山ともども百首を詠む。年不詳ながら景範が『枕草類詠』を著作したのは、蘭洲の『万葉集詠』に倣う気持からであろう。これまた著作年不詳ながら、景範著『新古今集旧注補遺』に儒教道德

的立場からの立論がある（小島吉雄著『新古今集の研究』所収、「新古今集旧注補遺」）のは、蘭洲の『古今通』から影響を受けたものであろう。

ところが、『古今通』の③明和九年奥書本には、蘭洲の仮託とか教誡とかの註釈に対し、「恐くは鑿せり」とか「この説穩常ならざる如し」とかの按文を添え、多少の遠慮を示しながらも批判する。そして、刪補本の稿本となった①大東急文庫本のおびたしい付箋（天明四・五年中の作業）では、蘭洲の特徴であった儒教道德的立場が堂々と攻撃される。たとえば、大東急文庫本には、卷十一（恋一）の初めに付された蘭洲の解説に対し、次のごとく記した紙片が挿入される。

註、外の部にても、いましめとする語あり、大かたハ従ひがたくミゆ。ことに此部におほく出たり。恋に託して志をのぶるハ、あるまじきものにもあらず。されど、すでに託したれば、その歌ハ恋歌の註釈をせば恋ばかりにて解すべし。……此部にあれば男女の間の歌とみてよきこと也。託の誠のと、うがちもとむるはいらざることか。然るに、註に、すこしにても手がかりあるハ、是ハ託也、彼ハ誠と解し玉へり。いかなることとおもふに、是らハ貫之を最

戻し玉へると、和歌を主張し玉へるとの、ふたつよりおこりけらし。一首なりとも、道理をつけらるる歌へ道理をつけて、すくひあげんの心より出て、公論とはいひがたし。されどこれハ君子の心ならん、わがこの駁ハ小人の心ならんかし。

この紙片の筆蹟は景範かと思われるが、上欄空白に「春楼先生駁あり」と記すから、三宅春楼（天明二年没）の説かも知れない。しかし、この紙片には「正論と云べ

し」と賛同の意が記されてもいる。景範を含め、刪補に關係した人々の共通の意向であつたと考えてよい。文芸の自立性は賀茂真淵や本居宣長によつて主唱された。景範らが真淵や宣長の影響を受けたかどうかは別のこととして、和歌を道徳から離した立場に立つて、『古今通』は刪補されたのである。

（大阪府立中之島図書館郷土資料課長）



「咏福寿草」

中井竹山

誰分禹疇目、小亭得佳名、
歳々氷霜底、開花応夏正、

（大阪大学蔵）